

日本気象学会1997年度春季大会の報告

日本気象学会1997年度春季大会は、筑波大学大学会館を会場として1997年5月21日(水)～23日(金)に行われた。参加者数(前納登録者と当日受付者の合計)は754名(一般会員481名, 学生会員199名, 非会員74名)であった。

2日目午後には、大学会館講堂において総会が開かれた。その際、佐藤信夫会員に日本気象学会賞が、関口理郎会員に藤原賞が授与され、総会終了後に受賞記念講演が行われた。引き続き、Browning 博士と Dickinson 博士を講師として「雲過程と陸面過程—21世紀への展望」と題する特別招待講演が行われた。

今回は大会改革のための新方式の試行として、ポスターによる一般発表と特定のテーマに基づいてコンビーナーが編成する6つの専門分科会とが行われた。

ポスター発表の件数は257件(交通機関のトラブル等のため若干のキャンセルがあった)、分科会での発表件数は89件で、計346件の発表数は昨年春季(310件)、秋季(305件)と比べてかなりの増加となった。なお、分科会への申込みで不採用となったもののうち4件が申込者の意向によりキャンセルとなっている(それ以外はポスターでの発表となった)。

会期中およびその前日と翌日には、個別のテーマによる研究会が4件開かれた。

最後に、今大会事務局として大会準備・運営にご尽力頂いた筑波大学はじめ、つくばの研究機関の皆様深く感謝の意を表します。

1997年6月 講演企画委員会

大会新方式についてのアンケート結果

今回('97春)は新方式の試行の大会でしたので、新方式についてのアンケートを行いましたところ、会場内で回収されたものの他、FAX等で送られてきたものもあわせて70通の回答がありました。ご協力ありがとうございました。

新方式についての強い反対意見は少なく、「当面様子を見る」という意味も含めて新方式の継続を支持する意見が過半を占めました。一方で、新方式が議論の活性化に役立ったかどうかについては「どちらとも言えない」とする意見も多く、さらなる改善が求められています。

個別の意見としては、ポスター発表によって「突っ込んだ議論ができた」とポスター形式を評価する意見が多く見られた反面、「ポスターセッションの時間が短すぎる」という批判も多数を占めました。分科会については、講演時間が長くなったことにより「突っ込んだ議論ができた」とする意見がある一方で「従来のセッションと変わらない」「議論を誘導する司会者の技量が必要」との声がありました。

講演企画委員会はこうした意見を基に次回以降の大

会のあり方を検討し、'98春季大会には以下のような方針で臨むこととしました。

- ・基本的には「ポスターによる一般発表+専門分科会」という'97春季大会の方式を踏襲する。
- ・午前の開始時刻の繰り上げ、午後の開始時刻の繰り下げ等によりポスターセッションの時間を今回よりも多く確保する。結果として分科会の時間は今回より短くなる。
- ・分科会については、コンビーナーを募集する際、より絞ったテーマでセッションのコンセプトを明確にした形での応募を求めることとする。

なお、分科会のテーマとコンビーナーの募集要領は8月号に掲載します

1997年6月 講演企画委員会

設問1. 今回の方式は従来の方式と比べ、議論の活性化に役立ったと思いますか? 1つ選んで下さい。

- | | |
|-------------|----|
| ・役立った。 | 33 |
| ・どちらとも言えない。 | 25 |
| ・逆効果だった | 5 |